

科目名 (英)	医学総論 Medical introduction	必修選択	必修	年次	1	担当教員	小林 穂	
		授業形態	講義	総単位時間	15	開講区分 曜日・時間	前期 金曜 6限	
【実務経験】								
言語聴覚士として、病院(急性期・慢性期・回復期)、老人保健施設、訪問看護ステーション、クリニック(訪問リハビリ・通所)等で勤務経験をもつ。								
【授業の学習内容】								
言語聴覚士として、医療に従事していくうえで、幅広い医学知識を持つことは非常に重要な事柄の一つであるといえる。医療従事者として必要な知識、専門用語や歴史、我が国の現状や展望、医療倫理・インフォームドコンセント・チーム医療などについて、具体的でわかりやすい授業を行なう。								
【到達目標】								
① コメディカルに必要とされる医学知識を学び、説明することができる。 ② 我が国の医学の概略、医療全体の現状を学び、今後どのように発展していくかを考え、説明することができる。 ③ 言語聴覚士として、医療分野でどんな役割を持ち、今後どうあるべきかを考え、説明することができる。								
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】				
・参考書、配布資料 他				教科書は特にありません。				
回	授業概要	回	授業概要					
1	【到達目標】 医学とはなにか、定義・歴史について学ぶ。医学の発展と倫理観を、医学的、社会的見地から理解し、説明することができる。 【授業内容】 ①医学の定義と使命・歴史 ②医学の発展と倫理	9	【到達目標】					
2	【到達目標】 我が国における人口統計、疾病について学び、原因、対応だけでなく、生活への影響などを理解し、説明することができる。 【授業内容】 ①人口統計と疾病の変化 ②生活への影響、対応	10	【到達目標】					
3	【到達目標】 健康とは何か、その概念や訪問についてを学ぶ。ICFの大まかな概念を理解し、QOL、医療・生活モデルについて説明することができる。 【授業内容】 ①健康の概念・状態 ②QOL、医療・生活モデル ③ICFの概念・考え方	11	【到達目標】					
4	【到達目標】 ICFの大まかな概念を理解し、QOL、医療・生活モデルについて説明することができる。 【授業内容】 ①ICFの考え方 ②中間テスト	12	【到達目標】					
5	【到達目標】 医療に関する職種と施設を知り、現状を把握、理解し、説明することができる。 【授業内容】 ①医療関係の職種 ②医療施設の種類の現状	13	【到達目標】					
6	【到達目標】 保健医療の対策、各種法規を学び、理解し、説明することができる。 【授業内容】 ①医療保険対策 ②医事法・薬事法・衛生法規	14	【到達目標】					
7	【到達目標】 感染対策としての基礎知識、原則を学び、標準予防策を理解し、説明、実施することができる。 【授業内容】 ①感染症対策の基礎知識 ②標準予防策	15	【到達目標】					
8	【到達目標】 医学総論におけるポイント、総合的な理解を再確認する。 【授業内容】 ①医学概論のまとめ ②定期試験		【評価について】					
【特記事項】				筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数 100~90点 = A評価 点数 89~80点 = B評価 点数 79~70点 = C評価 点数 69~60点 = D評価 点数 59点以下 = F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				

科目名 (英)	解剖生理学 I Anatomical and Physiology I	必修選択	必修	年次	1	担当教員	高野 海哉
		授業形態	講義	総単位時間	60	開講区分 曜日・時間	前期 月曜 6・7限
学科・コース	言語聴覚士科 II 部						
【実務経験】							
担当講師は大学学部で理学部生物系学科、大学院で人体解剖学を学んだ経験を有する。その後、看護師免許を取得し、看護専門学校および看護大学において解剖生理学の教育を担当している。							
【授業の学習内容】							
言語聴覚士の養成過程におけるさまざまな知識や技術を習得する際の基本的な知識として必要不可欠である。本科目の科目担当教員は、生物学を学んだのち人体解剖学を学んだ経験で人体を生物学的に見る視点と、看護師免許を取得して医療専門職に就いた経験で人体を医療専門職に必要な知識で見る視点の両面から、全身の構造と機能について一通り概説する。また、人を対象にする医療専門職である以上、対象となる人体の構造について専門的な知識を修得している必要があるが、初学年において人体の構造に関して興味関心を持てるような講義を、看護専門学校および看護大学で行なっている経験で行う。							
【到達目標】							
言語聴覚士になるために必要な知識や技術を習得するために必要な、基本的かつ重要な人体の構造について興味を持ち、習得することを目的とする。							
【使用教科書・教材・参考書】		【授業外における学習】					
(系統看護学講座 専門基礎1)解剖生理学(坂井建雄・岡田隆夫 著、医学書院) 「系統看護学講座」準拠 解剖生理学ワークブック(坂井建雄・岡田隆夫 編、医学		(予習)「解剖生理学ワークブック」の次回授業内容(下記参照)に該当するページの					
回	授業概要	回	授業概要				
1・2	【到達目標】 人体を構成する細胞に関する基本的な構造と機能を知る。人体を構成する4種の基本的な組織を知る。  【授業内容】 細胞の構造と機能(遺伝子の保持と発現、エネルギー産生) 人体を構成する4種の組織とその特徴	17・18	【到達目標】 自律神経系のはたらきを知る。 主要なホルモンの種類とはたらきを知る。  【授業内容】 自律神経系 内分泌器官とホルモン				
3・4	【到達目標】 呼吸器系の構造について知る。  【授業内容】 呼吸器系の構造について知る。	19・20	【到達目標】 骨組織および筋組織の特徴を知る 全身の主要な骨格と筋を知る。  【授業内容】 頭蓋骨、頭頸部の筋(咀嚼筋)				
5・6	【到達目標】 肺におけるガス交換の仕組みを知る+B30:D38。 血液の特徴とはたらきについて知る。  【授業内容】 ガス交換の仕組み 血液の組成 血球の種類 血液のはたらき	21・22	【到達目標】 神経系(中枢神経系と末梢神経系)の構造と機能を知る。  【授業内容】 脳と脳神経 脊髄と脊髄神経 神経系を保護する構造(脳脊髄膜・脳脊髄液) 脳の血液循环				
7・8	【到達目標】 血液循環の概要(体循環と肺循環)を知る。 心臓の構造と機能を知る。  【授業内容】 体循環と肺循環 心臓の構造 心臓のはたらき	23・24	【到達目標】 感覚器系の構造と機能を知る。  【授業内容】 体性感覚と特殊感覚 眼の構造と機能 耳の構造と機能 味覚と嗅覚				
9・10	【到達目標】 血管の構造と機能を知る。 循環調節の仕組みを知る。  【授業内容】 口腔から食道のしくみとはたらき 胃・小腸・大腸のしくみとはたらき	25・26	【到達目標】 皮膚のしくみとはたらきを知る。 免疫系のしくみとはたらきを知る。  【授業内容】 皮膚の構造と機能 免疫のしくみ				
11・12	【到達目標】 消化器系を構成する器官を知る。 消化管のしくみとはたらきを知る。  【授業内容】 口腔から食道のしくみとはたらき 胃・小腸・大腸のしくみとはたらき	27・28	【到達目標】 生殖器系のしくみとはたらきを知る 胎盤の構造を知る。胎児循環を知る。  【授業内容】 生殖器系 胎盤の構造と機能 胎児における血液循环(胎児循環)				
13・14	【到達目標】 肝臓・胆嚢・脾臓のしくみとはたらきを知る。  【授業内容】 肝臓の構造と機能 胆嚢の構造と機能 脾臓の構造と機能	29・30	【到達目標】  【授業内容】 定期試験				
15・16	【到達目標】 尿生成のしくみとその排泄を知る。  【授業内容】 腎臓と尿生成のしくみ 泌尿器系のしくみ		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小試験および中間試験を合わせた40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							



科目名 (英)	内科学 Internal Medicine	必修 選択	必修	年次	1	担当教員	小林 垣紀
		授業 形態	講義	総単位 時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 木曜 7限
学科・コース	言語聴覚士科 II 部						
【実務経験】							
病院では血液内科・循環器・消化器内科勤務経験、看護学校の教員経験あり。							
【授業の学習内容】							
日常耳にする疾患から入り、学生が卒業後出会う機会がある疾患を中心に分かりやすく伝えていく。症状や治療の詳細までを伝えるのではなく、各疾患のポイントと専門職として対応の際に注意したいポイントも含めて理解してもらえるように現場のケースなどを多く取り入れて進めていく。							
【到達目標】							
人体の構造と機能をふまえた上で病態を理解することで、医療職としてチームケアにあたることができる。また臨床検査値についても理解することで、臨床現場で患者・利用者と関わるときに異常の早期発見につなげることができる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学 第4版(医学書院)							
回	授業概要	回	授業概要				
1	【到達目標】 病態学とは何かがわかり、フィジカルアセスメントの重要性について理解する。 【授業内容】 病態・疾患学とは	9	【到達目標】 腎臓・尿路系疾患の病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 腎臓・尿路疾患				
2	【到達目標】 循環器の関連性についてイメージができる、主な循環器疾患の病態についてわかる。 【授業内容】 循環器疾患	10	【到達目標】 内分泌・代謝系の病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 内分泌・代謝疾患				
3	【到達目標】 循環器と呼吸器系の関連性について理解でき、呼吸器系の病態がわかる 【授業内容】 循環器疾患・呼吸器疾患	11	【到達目標】 膠原病やアレルギー系の病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 自己免疫・アレルギー疾患				
4	【到達目標】 呼吸器系の病態と症候、治療やかかわりかたについて理解できる 【授業内容】 呼吸器疾患	12	【到達目標】 血液系の病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 血液疾患				
5	【到達目標】 消化管の主な病態と症候、治療やかかわりかたについて理解できる 【授業内容】 消化管疾患	13	【到達目標】 神経・筋系の病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 神経・筋疾患				
6	【到達目標】 消化管の主な病態と症候、治療やかかわりかたについて理解できる 【授業内容】 消化管疾患	14	【到達目標】 内科学にかかる臨床検査の基準値と異常値を理解できる 【授業内容】 臨床検査				
7	【到達目標】 肝臓・胆のう・膵臓病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 肝・胆・膵疾患	15	【到達目標】 内科学にかかる臨床検査の基準値と異常値を理解できる 【授業内容】 臨床検査 定期試験				
8	【到達目標】 肝臓・胆のう・膵臓病態と症候、治療や関わり方について理解できる 【授業内容】 肝・胆・膵疾患		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							

科目名 (英)	小児科学 Pediatrics	必修選択	必修	年次	1	担当教員	木築千晴	
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 水曜 5・6限	
【実務経験】 産婦人科で5年従事その後保育園にて看護師として医療介入の必要な園児を担								
【授業の学習内容】 言語聴覚士が小児発育に携わるにあたり、必要な基礎知識を疾患ごとに取得していく成長・発達時期に起因する疾病の原因、診断、治療について学び、専門分野の基礎とする小児分野において成人とは異なる特有の生理をはじめ発達や病的状態の理解を行う								
【到達目標】 小児の成長・発育の特徴を理解する 小児の発達過程の特徴を説明することができる 周産期医学、障害、疾患について説明することができる								
【使用教科書・教材・参考書】 言語聴覚士のための基礎知識 「小児科学・発達障害学」 第3版 医学書院				【授業外における学習】 医療専門用語や難しい内容も多いので事前学習や予習をして講義を受ける また、講義後は復習を行う				
回	授業概要	回	授業概要					
1	【到達目標】 小児の成長・発達を学び理解することができる 【授業内容】 小児科学概論、小児の発達・成長	9	【到達目標】 循環器系疾患について学び理解することができる 【授業内容】 正常な血行動態・心構造、循環器疾患に伴う症状、循環器疾患を診断するための検査、先天性心疾患、後天性心疾患、不整脈					
2	【到達目標】 小児保健について学び理解することができる 【授業内容】 育児、乳幼児健診、事故、予防接種、児童虐待	10	【到達目標】 呼吸器疾患・感染症について学び理解することができる 【授業内容】 小児呼吸器の病態生理学的特徴、解剖別呼吸器疾患、感染経路別対策、学校感染症、予防接種、疾患各論					
3	【到達目標】 小児疾患の診断法について学び理解することができる 【授業内容】 小児疾患の診断法、問診、診察法、主要症状による鑑別診断	11	【到達目標】 消化器疾患・内分泌・代謝疾患について学び理解することができる 【授業内容】 消化器の正常な機能、消化器疾患の主要な症候、消化器疾患、内分泌疾患、代謝系疾患					
4	【到達目標】 遺伝疾患と先天異常について学び理解することができる 【授業内容】 遺伝疾患の分類と頻度、主な染色体異常症、先天奇形、先天代謝異常	12	【到達目標】 免疫・アレルギー疾患・膠原病について学び理解することができる 【授業内容】 免疫疾患、アレルギー総論、アレルギーの診断、アレルギー性疾患各論、膠原病・自己免疫疾患					
5	【到達目標】 新生児疾患について学び理解することができる 【授業内容】 新生児・周産期とは、新生児の分類と用語、ハイリスク新生児、新生児の生理と適応、低出生体重児・早産児、新生児仮死	13	【到達目標】 腎・泌尿器・生殖器疾患について学び理解することができる 【授業内容】 基本的知識、症候、検査、糸球体疾患、全身性疾患(に伴う腎障害)、遺伝性腎疾患、尿細管・間質性疾患、腎不全、腫瘍、尿路感染症、腎・尿路の先天異常、生殖器疾患					
6	【到達目標】 新生児疾患について学び理解することができる 【授業内容】 中枢神経系の障害、呼吸器疾患、循環器疾患、新生児感染症	14	【到達目標】 血液疾患・悪性腫瘍・心身症・神経症・眼科・耳鼻科系疾患について学び理解することができる 【授業内容】 貧血、出血性疾患、白血病、悪性腫瘍、子どもの心身症、眼科系疾患、耳鼻科系疾患					
7	【到達目標】 神経・骨・筋肉疾患について学び理解する 【授業内容】 神経系	15	【到達目標】 授業の内容の理解を深め定着、説明することができる 【授業内容】 定期試験					
8	【到達目標】 神経・骨・筋肉疾患について学び理解する 【授業内容】 骨・運動器、骨系統疾患		【評価について】 筆記試験による定期試験90点、授業態度10点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席率が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)					
【特記事項】								



科目名 (英)	臨床歯科医学・口腔外科学 I Clinical Dentistry and Dental Surgery I	必修選択	必須	年次	1	担当教員	莊司洋文
		授業形態	講義	総単位時間	15	開講区分 曜日・時間	前期 金曜 5限
学科・コース	言語聴覚士科 II部						
【実務経験】							
歯科大学および短期大学で歯科学生、歯科衛生士科学生に対し30年にわたり教育に携わる。							
【授業の学習内容】							
比較的馴染みが薄い歯科医学の専門用語や診療について担当教員が実際の臨床や教育現場で身につけた経験を生かした臨床歯科医学を解説する。担当教員の臨床経験を生かした具体的でわかりやすい質疑を繰り返し、『ことば』や『文字』でアウトプットする機会をつくり記憶の定着を図る授業を行なう。							
【到達目標】							
歯・顎・口腔の解剖、組織、生理、加齢的変化を知り、役割を説明できる。歯・顎・口腔領域の疾患を挙げ、特徴、診断法、治療法を説明できる。 歯科医療における言語聴覚士の役割を説明できる。歯科疾患および口腔病変を有する患者と言語聴覚士の関わりについて学ぶ。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学-器質性構音障害- 第2版 (医歯薬出版)				歯科特有の用語について事前に学習し、授業に備える。			
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【到達目標】 歯科医療の歴史と現状を知る 歯科医療における言語聴覚士の役割について理解する。 【授業内容】 歯科医療とは何か・歯科医療における言語聴覚士の役割。	9	【到達目標】	9	【到達目標】	9	【到達目標】
2	【到達目標】 歯・口腔・顎・顔面の構造と機能について理解する。 口腔の診断法について説明する。 【授業内容】 歯・口腔・顎・顔面の発生、構造、機能・口腔の診断法。	10	【到達目標】	10	【授業内容】	10	【到達目標】
3	【到達目標】 歯・歯周組織の疾患および歯科医学的処置について理解する。 【授業内容】 う蝕、歯髓炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損、歯の異常・口腔ケア。	11	【到達目標】	11	【授業内容】	11	【到達目標】
4	【到達目標】 口腔・顎・顔面の疾患について理解する。 【授業内容】 先天異常、発育異常、損傷、炎症、感染症、囊胞と腫瘍および類似疾患、神経系疾患、顎関節疾患、口腔粘膜疾患。	12	【到達目標】	12	【授業内容】	12	【到達目標】
5	【到達目標】 咀嚼・摂食・構音障害に対する歯科医学的治療法を理解する。 【授業内容】 手術療法、人工材料による機能回復、再建と機能回復。	13	【到達目標】	13	【授業内容】	13	【到達目標】
6	【到達目標】 咀嚼障害について説明できる。 【授業内容】 咀嚼障害の特徴、検査・評価、治療。	14	【到達目標】	14	【授業内容】	14	【到達目標】
7	【到達目標】 構音障害について説明できる。 【授業内容】 構音障害のメカニズム、特徴、検査・評価・口腔疾患による構音障害・チームアプローチ。	15	【到達目標】	15	【授業内容】	15	【到達目標】
8	【到達目標】 1~7の授業を振り返り、理解を定着させる。 【授業内容】 定期試験・授業の振り返り。		【評価について】				
【特記事項】			筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席率が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				



科目名 (英)	聴覚系の構造機能病態 I Physical and Functional Diseases of the Auditory System I	必修選択	必修	年次	1	担当教員	大田 智之	
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	前期 金曜 5、6限	
【実務経験】								
言語聴覚士として総合病院、リハビリテーション病院、地域リハビリテーションに携わる。他、養成校で非常勤講師を務める。								
【授業の学習内容】								
聴覚系の構造や機能を理解し、病態が起きた場合の症状について理解する								
【到達目標】								
聴器の解剖・生理学的知識、聴器に病態について学び、理解する。								
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】				
標準言語聴覚障害学－聴覚障害学 第3版 医学書院				<ul style="list-style-type: none"> <li>・予習と復習に力を入れる、教科書の該当箇所を熟読する</li> <li>・疑問を放置しない</li> </ul>				
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	
1	【到達目標】 聴覚・聴覚障害についての基本的な知識を理解する 【授業内容】 音と聴覚/聴覚障害とは	9	【到達目標】 伝音性難聴の特徴と、その障害について理解する 【授業内容】 伝音性難聴	10	【到達目標】 感音性難聴の特徴と、その障害について理解する 【授業内容】 感音性難聴(内耳性難聴)	11	【到達目標】 蝸牛神経から大脳までの構造や働き、後迷路性難聴について理解する 【授業内容】 後迷路性難聴	
2	【到達目標】 聴覚系の発達について理解する 【授業内容】 聴覚系の発生・発達①	10	【到達目標】 感音性難聴の特徴と、その障害について理解する 【授業内容】 感音性難聴(内耳性難聴)	11	【到達目標】 蝸牛神経から大脳までの構造や働き、後迷路性難聴について理解する 【授業内容】 後迷路性難聴	12	【到達目標】 混合性、片耳、機能性難聴、その他の併発症について理解する 【授業内容】 その名の難聴	
3	【到達目標】 聴覚系の発生、聴器の全体的な構造について理解する 【授業内容】 聴覚系の発生・発達② 聴覚系の構造と機能①	11	【到達目標】 蝸牛神経から大脳までの構造や働き、後迷路性難聴について理解する 【授業内容】 後迷路性難聴	12	【到達目標】 混合性、片耳、機能性難聴、その他の併発症について理解する 【授業内容】 その名の難聴	13	【到達目標】 難聴を伴う疾患、遺伝子疾患や家族性難聴などを理解する 【授業内容】 難聴を伴う疾患	
4	【到達目標】 外耳、中耳の構造・機能を理解する 【授業内容】 聴覚系の構造と機能②	12	【到達目標】 混合性、片耳、機能性難聴、その他の併発症について理解する 【授業内容】 その名の難聴	13	【到達目標】 難聴を伴う疾患、遺伝子疾患や家族性難聴などを理解する 【授業内容】 難聴を伴う疾患	14	【到達目標】 構造や機能を理解した上で、難聴についてのまとめを行う 【授業内容】 聴覚系の構造機能のまとめと病態	
5	【到達目標】 内耳(聴覚)の構造・機能を理解する 【授業内容】 聴覚系の構造と機能③	13	【到達目標】 難聴を伴う疾患、遺伝子疾患や家族性難聴などを理解する 【授業内容】 難聴を伴う疾患	15	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	14	【到達目標】 構造や機能を理解した上で、難聴についてのまとめを行う 【授業内容】 聴覚系の構造機能のまとめと病態	
6	【到達目標】 聴覚伝導路(聴覚路)の構造・機能を理解する 【授業内容】 聴覚系の構造と機能④	14	【到達目標】 構造や機能を理解した上で、難聴についてのまとめを行う 【授業内容】 聴覚系の構造機能のまとめと病態	15	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	16	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	
7	【到達目標】 内耳(平衡器)の構造・機能を理解する 【授業内容】 聴覚系の構造と機能⑤	15	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	16	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	17	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	
8	【到達目標】 前半の授業の振り返りをして、知識を定着させる 【授業内容】 中間テスト、前半の振り返り	17	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)	18	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	19	【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習	
【特記事項】				【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				【到達目標】 これまでの講義内容について振り返り、知識を定着させる 【授業内容】 定期テスト、終復習



科目名 (英)	臨床心理学 I Clinical psychology I	必修 選択	必須	年次	1	担当教員	柳 忠宏
		授業 形態					前期
学科・コース	言語聴覚士科 II 部	講義	総単位 時間	30	開講区分 曜日・時間	金曜 7限	
【実務経験】							
臨床心理士、公認心理師。中学・高等学校の教諭として12年の教育臨床経験がある。専門学校のスクールカウンセラーとして、6年の心理臨床経験がある。							
【授業の学習内容】							
本科目を通じて、臨床実践にかかわる心理学の理論について、体系的に学習する。 また、内省やグループワークの機会を設ける中で、一人ひとりが自己理解と他者理解を深化させ、臨床場面での素養を醸成してほしい。							
【到達目標】							
心の特性や疾患、援助に役立つ理論について説明できる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
言語聴覚士のための心理学 第2版 医歯薬出版				心理学の専門的用語がでてくるので、予め教科書を読み、予習をしてくること。 分からぬ用語は、ネット検索を用いてもよい。			
回	授業概要	回	授業概要				
1	【到達目標】 類型論を説明できる。  【授業内容】 オリエンテーション、パーソナリティ理論	9	【到達目標】 知能検査を説明できる。  【授業内容】 臨床心理学的アセスメント				
2	【到達目標】 特性論を説明できる。  【授業内容】 パーソナリティ理論	10	【到達目標】 発達検査を説明できる。  【授業内容】 臨床心理学的アセスメント				
3	【到達目標】 発達障害を説明できる。  【授業内容】 発達各期における心理臨床	11	【到達目標】 パーソナリティ検査、面接、行動観察を説明できる。  【授業内容】 臨床心理学的アセスメント				
4	【到達目標】 不登校、引きこもり、摂食障害、自我同一性の障害を説明できる。  【授業内容】 発達各期における心理臨床	12	【到達目標】 クライエント中心療法、精神分析療法、遊戲療法を説明できる。  【授業内容】 心理療法				
5	【到達目標】 精神分析、気分障害、統合失調症を説明できる。  【授業内容】 異常心理	13	【到達目標】 行動療法、認知療法を説明できる。  【授業内容】 心理療法				
6	【到達目標】 心的外傷およびストレス因関連障害、パーソナリティ障害、不安症、強迫症を説明できる。  【授業内容】 異常心理	14	【到達目標】 集団心理療法、家族療法を説明できる。  【授業内容】 心理療法				
7	【到達目標】 心身症、意識の障害、診断基準・国際の疾病分類(DSM、ICD)を説明できる。  【授業内容】 異常心理	15	【到達目標】 定期試験でおさらいをし、臨床心理学の理解を深める。  【授業内容】 定期試験				
8	【到達目標】 中間試験でおさらいをし、臨床心理学の理解を深める。 知能検査を説明できる。  【授業内容】 中間試験、臨床心理学的アセスメント		【評価について】				
【特記事項】				筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)			
板書したこと等は必ずメモをとること。							

科目名 (英)	生涯発達心理学 Life-span Developmental Psychology	必修選択	必修	年次	1	担当教員	田島 葵	
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 火曜 5・6限	
【実務経験】								
子育て支援関連、保育士・放課後児童支援員や保護者への相談支援、カウンセラーとしての心理的支援等に20年携わる経験をもつ。								
【授業の学習内容】								
臨床心理学を専門とし、様々な対象への相談支援に関わってきてている教員が、人間の一生の変化の過程である発達の基礎的な理論について理解できるよう講義を進めていく。単なる国家試験対策の知識だけではなく、日常生活における具体例を通して理解できるよう教授していく。様々な事例的内容を取り入れていくことにより、実際的な発達の理解を促す。想像力を働かせながら授業を受けることが望まれる。								
【到達目標】								
・代表的な発達の流れを把握する								
・生育歴からアセスメントが出来るようになる								
・発達障害の特徴と対応がわかる								
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】				
言語聴覚士のための心理学 山田弘幸著 医歯薬出版株式会社				毎回の授業で確実に理解して欲しいことを小テストで出題するため、その内容を確実に復習すること。また予習としてテキストを読んでからの受講を望む。				
回	授業概要	回	授業概要					
1	【到達目標】 発達とは何か説明できる。 人間の発達の特徴を列挙できる。 【授業内容】 発達の概念	9	【到達目標】 反抗期の意味について説明できる。 共感能力とは何か説明できる。 【授業内容】 自己・他者認知の発達					
2	【到達目標】 発達段階名を順に列挙し説明できる。 【授業内容】 フロイト・ピアジェの発達段階	10	【到達目標】 言葉の発達の流れが説明できる。 各年代のコミュニケーションの特徴が説明できる。 【授業内容】 言葉・コミュニケーションの発達					
3	【到達目標】 各年代の発達課題を列挙できる。 【授業内容】 エリクソンの発達段階	11	【到達目標】 知能とは何か説明できる。 主要な学習理論について列挙できる。 【授業内容】 知能の発達と学習理論					
4	【到達目標】 言葉・遊びの発達について説明できる。 【授業内容】 基本的生活習慣の確立が説明できる。 乳幼児期の発達	12	【到達目標】 適応とは何か説明できる。 より良い環境とはどのようなものか考察できる。 【授業内容】 発達と環境の関係 ストレス					
5	【到達目標】 低学年・中学年・高学年それぞれの特徴が説明できる。 【授業内容】 児童期の発達	13	【到達目標】 発達障害名からその特徴を説明できる。 【授業内容】 発達障害 知的障害					
6	【到達目標】 青年期の変化を列挙できる。 アイデンティティとは何か説明できる。 【授業内容】 青年期の発達	14	【到達目標】 ストレスがどのような行動として表れやすいのか説明できる。 【授業内容】 発達期に生じる心理的問題					
7	【到達目標】 成人期における社会生活の変化を説明できる。 加齢現象と適応について説明できる。 【授業内容】 成人期・高齢期の発達	15	【到達目標】 国試に必要な知識が習得できているか確認し、復習に生かす。 【授業内容】 定期試験					
8	【到達目標】 7回目までの内容が理解できているか確認する。 【授業内容】 中間テスト		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)					
【特記事項】								
板書をしっかりとノートにとること								









科目名 (英)	言語聴覚障害診断学 I Diagnosis of Speech and hearing Disabilities I	必修選択	必修	年次	1	担当教員	中澤 裕也
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	前期 木曜 5・6限
学科・コース	言語聴覚士科 II 部						
<b>【実務経験】</b>							
言語発達障害児に言語聴覚士として、7年程度の勤務経験あり。ポーテージ早期教育プログラム認定相談員。							
<b>【授業の学習内容】</b>							
小児の障害児通園施設で、言語発達障害児に対して言語聴覚療法を実践してきた教員の経験を生かして、分かりやすい質疑を実施し知識の理解を深める。また、実習機関のスーパーバイザーとしての実績を生かして、小児実習に必要な知識を講義する。さらに、言語発達障害児の評価・言語病理学的診断に必要な検査法をビデオや実際の検査用具を使用し、実践的な理解を目指す。							
<b>【到達目標】</b>							
・定形発達を理解することにより、言語発達障害児に対する行動評価を行う事が出来る。 ・言語病理学的診断に必要な言語発達検査・知能検査の実施方法・結果の解釈を演習形式で学び理解を深める。 ・小児学内実習に向けて必要な知識を学び、スムーズに実習を行う事が出来るようになる。							
<b>【使用教科書・教材・参考書】</b>				<b>【授業外における学習】</b>			
「言語聴覚士のための臨床実習テキスト(小児編)」 建帛社 「言語聴覚診断一小児編」 医学と看護社 ・各検査マニュアル ・配布資料				専門用語が出てくるので、予習復習を行う事。			
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【到達目標】 言語発達障害の概要と支援の場にあつた評価の目的や発達段階による評価の目的について学び、説明できる。  【授業内容】 言語発達障害とは 言語発達障害の評価の目的について	9	【到達目標】 WISC-IV知能検査の下位検査の評価点・指標得点・全検査IQ(FSIQ)の算出方法を学び、実施することができる。  【授業内容】 下位検査の評価点・指標得点・全検査IQ(FSIQ)の算出方法の演習	10	【到達目標】 WISC-IV知能検査の障害特性による結果の現れ方を学び、結果の考察ができる。中間テスト。  【授業内容】 障害別に現れやすい指標ごとの差について。 中間テスト	11	【到達目標】 絵画語り発達検査(PVT-R)と質問-応答関係検査について、概要と目的を学び、説明できる。また、グループで検査を実施することができる。  【授業内容】 絵画語り発達検査(PVT-R)と質問-応答関係検査の演習。
2	【到達目標】 S-S法の動画を見て、実施方法を理解する。またマニュアルから概要・一般的な実施手順について理解し、説明出来る。  【授業内容】 S-S法の概要・実施手順。言語行動の3側面(「基礎的プロセス」「記号形式—指示内容関係」「コミュニケーション態度」)について	12	【到達目標】 対症児の情報収集の目的と、基礎情報・現症に関する情報等で収集する情報について学び、説明できる。  【授業内容】 レポートをまとめる際の情報収集の仕方や項目について。 基礎情報の概要について。	13	【到達目標】 ケースレポートの意義・記載すべき内容と留意点を理解する。また、ケースレポートの例を参考に、まとめ方を学ぶ。  【授業内容】 例から報告書のまとめ方のポイント・記載内容・記載時の留意点について	14	【到達目標】 ケースレポートの意義・記載すべき内容と留意点を理解する。また、ケースレポートの例を参考に、まとめ方を学ぶ。  【授業内容】 例から報告書のまとめ方のポイント・記載内容・記載時の留意点について
3	【到達目標】 S-S法の段階2・3についての実施方法を学び、実施する事ができる。  【授業内容】 段階2・3についての実施手順の確認と演習。	15	【到達目標】 VCIの下位検査(積木模様・絵の概念・行列推理・絵の完成)と処理速度指標(PSI)の下位検査について、実施方法と結果の記入方法を学び、実施できる。  【授業内容】 VCIの下位検査(類似・単語・理解・知識・語の推論) PSIの下位検査(数唱・語音整列・算数)の演習	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)			
【特記事項】							







科目名 (英)	失語症Ⅱ aphasia Ⅱ	必修選択	必修	年次	1	担当教員	小林 稔		
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 水曜 5・6限		
学科・コース	言語聴覚士科Ⅱ部								
【実務経験】									
言語聴覚士として、病院(急性期・慢性期・回復期)、老人保健施設、訪問看護ステーション、クリニック(訪問リハビリ・通所)等で勤務経験をもつ。									
【授業の学習内容】									
失語症における言語症状、タイプ分類を理解し、治療計画の立案、訓練法の選択などより実践的な点を学んでいく。実務経験を生かし、臨床の現場や実習に必要な学びを得られるような授業を行ないます。また、現在の言語聴覚療法において主流となっている、認知神経心理学的プログラム(ロゴジエンモデル)を用いて症状を理解し、検査の解釈、目標設定、適切な訓練立案を行なえるようにわかりやすく学習する。									
【到達目標】									
①失語症の基礎的知識、それぞれの失語タイプの特徴を復習する。 ②失語症の障害メカニズムを言語処理モデル(ロゴジエン・モデル)に沿って学び、説明ができる。 ③検査結果を障害メカニズムに照らし合わせ、問題点から訓練方法を考え、その技法を学ぶ。									
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】					
・「標準言語聴覚障害学 失語症学第2版」医学書院 ・「失語症訓練の考え方と実際—新人STへのヒント—」三輪書店 他				専門用語について、事前学習をしておくこと。					
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要		
1	【到達目標】 失語症の基礎的知識を復習する。どのような言語症状を呈し、それぞれの失語症タイプの特徴を理解、説明できる。  【授業内容】 ①失語症とは何か ②失語症の言語症状	9	【到達目標】 言語処理モデルにおける単語、短文・長文の処理(理解)過程を説明することができる。  【授業内容】 ①単語・短文・長文の理解過程	10	【到達目標】 言語処理モデルにおける言葉(呼称、復唱、動作説明、語列挙など)の表出過程を説明することができる。  【授業内容】 ①言葉の表出過程	11	【到達目標】 言語処理モデルにおける読解や音読の処理過程を説明することができる。言語処理モデルにおける書称や書取の処理過程を説明することができる。  【授業内容】 ①読解・音読の過程 ②書称・書取の過程	12	【到達目標】 標準失語症検査の結果解釈を行ない、目標設定、適切な訓練の選択、訓練時の着眼点、注意点、訓練実施の際の注意点、訓練法を説明できる。  【授業内容】 ①検査の解釈、目標設定、訓練立案
2	【到達目標】 治療における専門的対処を、ICFの概念から説明できる。リハビリテーションの過程、各期を考え、どのような関わりを持つ必要があるかを学ぶ。  【授業内容】 ①失語症治療の原則 ②ICFの概念 ③各期の言語治療	13	【到達目標】 標準失語症検査の結果解釈を行ない、目標設定、適切な訓練の選択、訓練時の着眼点、注意点、訓練実施の際の注意点、訓練法を説明できる。  【授業内容】 ①検査の解釈、目標設定、訓練立案	14	【到達目標】 標準失語症検査の結果解釈を行ない、目標設定、適切な訓練の選択、訓練時の着眼点、注意点、訓練実施の際の注意点、訓練法を説明できる。  【授業内容】 ①検査の解釈、目標設定、訓練立案	15	【到達目標】 治療の原則、理論と技法を理解し、評価・解釈、目標設定、訓練立案の総合的な理解を確認する。  【授業内容】 ①失語症の言語治療のまとめ ②定期試験	【評価について】  筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)	
7	【到達目標】 急性期、回復期における言語聴覚士の関わり、評価、安全管理、評価・訓練、指導や援助などを説明することができる。  【授業内容】 ①急性期・回復期の訓練・援助	16	【到達目標】 回復期における訓練、対応などを説明できる。維持期における評価、訓練、指導や援助、社会復帰に関する要因などを説明することができる。  【授業内容】 ①回復期・維持期(生活期)の訓練・援助、社会復帰 ②中間テスト	17	【到達目標】 回復期における訓練、対応などを説明できる。維持期における評価、訓練、指導や援助、社会復帰に関する要因などを説明することができる。  【授業内容】 ①回復期・維持期(生活期)の訓練・援助、社会復帰 ②中間テスト	18	【到達目標】 回復期における訓練、対応などを説明できる。維持期における評価、訓練、指導や援助、社会復帰に関する要因などを説明することができる。  【授業内容】 ①回復期・維持期(生活期)の訓練・援助、社会復帰 ②中間テスト	【特記事項】	









科目名 (英)	音声障害Ⅰ Dysphonia	必修選択	必修	年次	1	担当教員	大沢良輔	
		授業形態	演習	総単位時間	15	開講区分 曜日・時間	後期 金曜 6.7限	
【実務経験】								
医療機関の職員として、医師から指示を受け音声障害分野に携わる。								
【授業の学習内容】								
音声障害の種類と内容、検査法、及び治療・訓練の理念とその方法を理解してほしい。そのためにも、難解な専門用語や理論を現場経験で身につけた経験を生かし独自の事例や知識を生かして独自資料にまとめ使用すると共に、具体的でわかりやすい質疑を繰り返し、記憶の定着を図る授業を行なっていく。その他、海外の音声治療に精通した方々をお呼びしセミナーを開催した経験から、言語聴覚士の役割について授業を展開する。								
【到達目標】								
正常発声のメカニズムを理解し、音声障害をきたす疾患の特徴を知る。音声障害の評価として聴覚心理的評価や各検査法の特徴を理解し声の異常を検出できるようになる。								
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】				
使用教科書:発声発語障害学第3版 医学書院。配布資料。				専門用語が出てくるので事前学習をきちんとし、授業に備える。				
回	授業概要	回	授業概要					
1	【到達目標】 喉頭の構造を理解したうえで喉頭の働きを理解する。また、喉頭を構成する軟骨を加え喉頭の枠組みを理解できる。 【授業内容】 発声の仕組みと声の障害	9	【到達目標】 【授業内容】					
2	【到達目標】 喉頭筋である内喉頭筋と外喉頭筋の役割を理解する。また喉頭筋の走行や神経支配を理解できる。 【授業内容】 発声器官の構造・機能	10	【到達目標】 【授業内容】					
3	【到達目標】 発声の神経として高位中枢や末梢神経系における制御を理解する。また、呼吸器の構造を理解し呼気調節を理解できる。 【授業内容】 発声の生理とその調節	11	【到達目標】 【授業内容】					
4	【到達目標】 音声障害疾患の分類及び各疾患の特徴を理解する。 【授業内容】 音声障害をきたす疾患	12	【到達目標】 【授業内容】					
5	【到達目標】 音声障害をきたす疾患の原因を理解し、病態と疫学を説明できる。 【授業内容】 音声障害の原因	13	【到達目標】 【授業内容】					
6	【到達目標】 声の異常や自覚症状、他覚的症状・随伴症状を理解したうえで声質以外の特殊症状を説明できる。 【授業内容】 音声障害の症状	14	【到達目標】 【授業内容】					
7	【到達目標】 声の異常を評価する4要素を理解し聴覚心理的評価が行えるようになる。 【授業内容】 音声障害の評価(聴覚心理的評価)	15	【到達目標】 【授業内容】					
8	【到達目標】 本試験を通して、音声障害についての理解を定着させる 【授業内容】 本試験		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数 100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)					
【特記事項】				特記事項無し				

科目名 (英)	器質性構音障害 Organic Articulation Disorders	必修選択	必修	年次	1	担当教員	西脇恵子
		授業形態	講義	総単位時間	15	開講区分 曜日・時間	後期 水曜 7限
学科・コース	言語聴覚士科Ⅱ部						
【実務経験】							
現在の勤務する施設では、口腔がん術後、口唇口蓋裂、舌小帯付着異常といった器質性構音障害の臨床が多い。							
【授業の学習内容】							
授業は教科書に沿って行うが、担当教員は、各種の器質性構音障害に関する臨床経験が豊富であり、実際の音声や画像のデータを紹介しながら、この領域の理解をすすめる。また、評価の一部を実際に模擬実習し、それに伴う考察を行う。または学生同士の演習も授業の中で行うので、それらに積極的な参加をすることが望ましい。							
【到達目標】							
器質性構音障害の種類と原因疾患を知るとともに、その医学的な治療法を知り、言語聴覚士としての対応を理解する							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
城本修・原由紀編標準言語聴覚障害学「発声発語障害学」第3版(医学書院) 必要によってプリントを配布します。				予習より復習が大切です			
回	授業概要	回	授業概要				
1	【到達目標】 器質性構音障害について学び、原因疾患や症状が理解できる。 【授業内容】 発話障害の中の器質性構音障害の定義や原因疾患、症状について	9	【到達目標】 【授業内容】				
2	【到達目標】 発声発語に関する筋や神経の走行と働きが理解できる。 【授業内容】 発声発語機能の成り立ち、発声発語に必要な筋や神経の走行	10	【到達目標】 【授業内容】				
3	【到達目標】 口唇口蓋裂の症状と治療、発話障害の症状と対応が理解できる。 【授業内容】 口唇口蓋裂に伴う症状と対応	11	【到達目標】 【授業内容】				
4	【到達目標】 構音障害の臨床における一連の流れが理解できる。 【授業内容】 中間テスト 構音障害の臨床について	12	【到達目標】 【授業内容】				
5	【到達目標】 舌小帯付着異常の症状と治療、発話障害の症状と対応が理解できる。 【授業内容】 舌小帯付着異常に伴う症状と対応	13	【到達目標】 【授業内容】				
6	【到達目標】 口腔がんの症状と治療、発話障害の症状と対応が理解できる。 【授業内容】 口腔がん術後に伴う症状と対応	14	【到達目標】 【授業内容】				
7	【到達目標】 先天性鼻咽腔閉鎖不全症、舌の形成不全、下顎前突症といったその他の器質性構音障害の症状と対応が理解できる 【授業内容】 その他の器質性構音障害の症状と対応	15	【到達目標】 【授業内容】				
8	【到達目標】 器質性構音障害の症状とリハビリテーションを理解できる 【授業内容】 定期試験・授業の振り返り		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数 100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							

科目名 (英)	機能性構音障害 Speech Disorders	必修選択	必修	年次	1年	担当教員	梶野 聰
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 金曜 6・7限
学科・コース	言語聴覚士科Ⅱ部						
【実務経験】							
言語発達障害児に言語聴覚士として、7年程度の勤務経験あり。ポーテージ早期教育プログラム認定相談員。							
【授業の学習内容】							
本科目では、機能性構音障害についての基礎知識や評価法・訓練プログラムの立案方法などを、教科書・参考資料を使用し講義を行うとともに、担当教員が臨床で経験した症例や知識を生かした講義や質疑応答形式・グループワークなどを行う。さらに動画・音声教材などを活用し、より具体的に臨床像を掴む事で、理解を深めて欲しい。							
【到達目標】							
機能性構音障害についての定義・誤り音の種類や異常構音のタイプなど基礎的な知識を学び、説明する事ができる。							
機能性構音障害の評価法である構音検査の実施方法と結果の解釈を理解し実施する事ができる。							
構音障害のタイプに応じて訓練方法の選択・訓練プログラムの立案の方法を学び、説明する事ができる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
「構音障害の臨床—基礎的知識と実践マニュアルー改訂第2版」金原出版 ・異常構音サンプルCD、配布資料				専門用語が出てくるので、予習復習を行う事。			
回	授業概要	回	授業概要				
1	【到達目標】 構音の概要やメカニズム・構音器官についての概要を理解し、説明出来る。また、構音の発達について、子音の獲得時期等を理解し、 【授業内容】 発声・共鳴・構音について 子音の獲得時期について	9	【到達目標】 タ行音・ダ行音の訓練方法の概要を学び実践できる。 【授業内容】 タ・ダ行音の構音訓練方法の演習				
2	【到達目標】 構音障害の誤り音の分類と構音障害の概要を理解し、説明できる。 異常構音の定義と特徴を理解し、違いを説明出来る。 【授業内容】 構音の誤りのタイプ3つ 異常構音について	10	【到達目標】 サ行音・ツ・ズの訓練方法の概要を学び実践できる。 【授業内容】 サ・ザ・ツ・ズ行音の構音訓練方法の演習				
3	【到達目標】 構音検査の概要と実施内容・方法を理解し、説明できる。また、グループで演習することが出来る。 【授業内容】 構音検査の演習① 検査の実施方法	11	【到達目標】 異常構音の訓練方法の概要を学び実践できる。 【授業内容】 側音化構音・口蓋化構音の構音訓練について				
4	【到達目標】 構音検査のサンプルから、構音の誤りを記録用紙に記録する事ができる。また、グループで検査結果をまとめる事ができる。 【授業内容】 構音検査の演習② 検査の記録方法	12	【到達目標】 異常構音の訓練方法の概要を学び、説明できる。 【授業内容】 咽頭破裂音・咽頭破擦音・声門破裂音の構音訓練について				
5	【到達目標】 構音検査のサンプルから、構音の誤りを記録用紙に記録する事ができる。また、グループで検査結果をまとめる事ができる。 【授業内容】 構音検査の演習③ 検査のまとめの仕方	13	【到達目標】 実際の構音検査の音声を聞いて、IPAを用いて検査結果を記録できる。また、グループで記録をまとめることが出来る。 【授業内容】 IPAの再確認。 構音検査の記録の仕方。				
6	【到達目標】 構音訓練の概要や注意点などを学び、説明出来る。また、系統的構音訓練の手順を学び、説明出来る。 【授業内容】 系統的構音訓練について 構音訓練(舌の脱力)について	14	【到達目標】 機能性構音訓練の実際について、異常構音別の出現率などを理解し、説明できる。 【授業内容】 異常構音別の出現率など。 鼻咽腔閉鎖機能に関する評価について				
7	【到達目標】 カ行音・ガ行音の訓練方法の概要を学び実践できる。 【授業内容】 カ・ガ行音の構音訓練方法の演習	15	【到達目標】 講義内容についての定期試験を実施し、知識の定着を図る。 【授業内容】 定期試験				
8	【到達目標】 中間テスト。これまでの講義内容の復習をし、内容を理解する。 カ行の構音訓練の演習 【授業内容】 中間テスト。 カ・ガ行音の構音訓練方法の演習		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							

科目名 (英)	運動障害性構音障害 I dysarthria I	必修選択	必修	年次	1	担当教員	山崎 勇太
		授業形態	講義・演習	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 金曜 6,7限
学科・コース	言語聴覚士科 II部						
【実務経験】							
言語聴覚士として生活期で訪問リハビリテーション、外来リハビリテーション、言語ディイケア、言語デイサービス、介護老人保健施設での臨床経験を持つ。							
【授業の学習内容】							
生活期のクリニックで運動障害性構音障害の評価訓練、支援を行ってきた現役の言語聴覚士が理論と実技について、現場の実情を交えつつ講義を行います。また運動障害性構音障害につながる解剖学、生理学、病理学、臨床神経学、音声学、発声発語器官の機能構造病態、神経系の機能構造病態の復習を行いつつ講義を行います。臨床科目として基礎科目での理解度が大きく必要になる科目なので、今までの講義の見返しを行いつつ授業に臨んで下さい。							
【到達目標】							
運動障害性構音障害の定義が口頭で説明できる。運動障害性構音障害の症状とタイプを表を見て理解できる。運動障害性構音障害の検査方法を理解できる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
「ディサークリア 臨床標準テキスト」(医歯薬出版)標準言語聴覚障害学「発声発語障害学 第三版」(医学書院) プリント配布				上記、他科目の講義の資料を読み返して復習を行ってください			
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【到達目標】 運動障害性構音障害の5つの要素を説明できる。言語障害としての運動障害性構音障害の位置づけを理解できる 【授業内容】 運動障害性構音障害の定義(分類、疫学など)、発声発語の5つの要素、運動障害性構音障害と失語症の鑑別について	9	【到達目標】 標準ディサークリア検査の手順と適応が理解できる 【授業内容】 AMSD 発声発語器官「鼻咽腔閉鎖機能、口腔構音運動・単発運動」について	11	【到達目標】 運動障害性構音障害の痙性 持続性 UUMN 運動低下、タイプの発話特徴と原因疾患の理解ができる 【授業内容】 痙性 持続性 UUMN 運動低下タイプの特徴について	13	【到達目標】 運動障害性構音障害の運動過多 失調性 混合性タイプの発話特徴と原因疾患の理解ができる 【授業内容】 運動過多 失調性 混合性タイプの特徴について
2	【到達目標】 運動障害、呼吸・発声障害、鼻咽腔閉鎖機能障害で起こる症状を理解できる 【授業内容】 運動障害とはなにか 麻痺、失調、固縮、拘縮について。呼吸・発声機能障害、鼻咽腔閉鎖機能不全で起こる症状と発話特徴。	10	【到達目標】 標準ディサークリア検査の手順と適応が理解できる 【授業内容】 AMSD 発声発語器官「口腔構音器官・交互反復運動・筋力」について。結果のまとめ方について	12	【到達目標】 実際の症例の情報を元に、タイプを予想し発話特徴を含めて総合的なタイプ分類ができる。 【授業内容】 症例の基本情報と発話特徴からタイプ分類を実際に使う	14	【到達目標】 生活期の運動障害性構音障害の患者をICFに基づいてまとめ分析ができる 【授業内容】 運動障害性構音障害と予後について。症例の情報をICFに沿ってまとめ、全体像を把握する。
3	【到達目標】 プロソディ障害、構音機能障害で起こる症状を理解できる 【授業内容】 日本語に使用される構音方法、構音点について。運動障害で起こる構音障害の症状について。プロソディ機能障害の症状について	11	【到達目標】 運動障害性構音障害の痙性 持続性 UUMN 運動低下、タイプの発話特徴と原因疾患の理解ができる 【授業内容】 痙性 持続性 UUMN 運動低下タイプの特徴について	13	【到達目標】 運動障害性構音障害の運動過多 失調性 混合性タイプの発話特徴と原因疾患の理解ができる 【授業内容】 運動過多 失調性 混合性タイプの特徴について	15	【到達目標】 誤った問題の正答とその理由を理解する 【授業内容】 定期試験・実施
4	【到達目標】 新版・構音検査の方法と手順が理解できる。機械を用いた検査、発話特徴抽出検査の理解ができる 【授業内容】 運動障害性構音障害の検査とはなにか。新版・構音検査、発話特徴抽出検査、機器を用いた検査について	12	【到達目標】 運動障害性構音障害の運動過多 失調性 混合性タイプの発話特徴と原因疾患の理解ができる 【授業内容】 運動過多 失調性 混合性タイプの特徴について	14	【到達目標】 生活期の運動障害性構音障害の患者をICFに基づいてまとめ分析ができる 【授業内容】 運動障害性構音障害と予後について。症例の情報をICFに沿ってまとめ、全体像を把握する。	15	【到達目標】 誤った問題の正答とその理由を理解する 【授業内容】 定期試験・実施
5	【到達目標】 構音障害のスクリーニングについて実際の手順を理解して実施できる 【授業内容】 構音障害のスクリーニングを実施	13	【到達目標】 実際の症例の情報を元に、タイプを予想し発話特徴を含めて総合的なタイプ分類ができる。 【授業内容】 症例の基本情報と発話特徴からタイプ分類を実際に使う	15	【到達目標】 誤った問題の正答とその理由を理解する 【授業内容】 定期試験・実施	16	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)
6	【到達目標】 標準ディサークリア検査の手順と適応が理解できる 【授業内容】 AMSD の用具や構成について。発話明瞭度、発話自然度、発話特徴、発話速度について	14	【到達目標】 生活期の運動障害性構音障害の患者をICFに基づいてまとめ分析ができる 【授業内容】 運動障害性構音障害と予後について。症例の情報をICFに沿ってまとめ、全体像を把握する。	16	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)		
7	【到達目標】 標準ディサークリア検査の手順と適応が理解できる 【授業内容】 AMSD 発声発語器官「呼吸、発声」について	15	【到達目標】 誤った問題の正答とその理由を理解する 【授業内容】 定期試験・実施	16	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)		
8	【到達目標】 誤った問題の正答とその理由を理解する。ここまで復習を行う 【授業内容】 中間試験・実施	16	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)	17	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)		
【特記事項】		教科書では国家試験、臨床で必要な知識、技術の取得が難しいため、プリントや資料中心で行います。教科書は参考書として使用して下さい。					

科目名 (英)	嚥下障害概論 Introduction to Dysphagia	必修選択	必修	年次	1	担当教員	矢澤一彦
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	前期 木曜6限
学科・コース	言語聴覚士Ⅱ部						
【実務経験】							
回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟で、9年間、摂食嚥下機能障害の患者様へのリハビリテーション経験を持つ							
【授業の学習内容】							
回復期リハビリテーション病院で摂食嚥下機能障害患者様にリハビリテーションを行ってきた経験を持つ教員が、摂食嚥下機能の基礎的な内容(解剖・生理、嚥下プロセス)と治療としての外科的対応と口腔内装置による対応について講義を行う、また評価の為の検査や訓練についても可能な限り実習を行っていく。							
【到達目標】							
・摂食嚥下器官の解剖と生理や神経機構の基礎を十分に理解し説明できる ・嚥下内視鏡や嚥下造影検査の動画を見て、臨床に活かせているようにする							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
・摂食嚥下リハビリテーション第3版【対応頁】・p44～119:基礎編・p185～193:口腔衛生管理・p236～251:外科的対応・口腔内装置による対応				覚えるべき用語を暗記する努力をする			
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【到達目標】 摂食嚥下機能障害の定義について説明できる。  【授業内容】 摂食嚥下機能障害の定義	9	【到達目標】	10	【到達目標】 摂食嚥下機能の発達と加齢について理解し説明できる  【授業内容】 摂食嚥下機能の発達と加齢	11	【到達目標】 摂食嚥下の障害の基礎症状について理解し説明できる  【授業内容】 摂食嚥下障害の基礎症状
2	【到達目標】 摂食嚥下器官である口腔と咽頭の解剖用語を列挙し、各々について説明できる。  【授業内容】 口腔の構造 テキストP44～P51	10	【到達目標】 摂食嚥下機能の発達と加齢について理解し説明できる  【授業内容】 摂食嚥下機能の発達と加齢	12	【到達目標】 口腔ケアなどの口腔衛生管理について学び、その手技などを説明できるようになる。  【授業内容】 口腔衛生管理 テキストP185～P193	13	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する外科的アプローチや口腔内装置にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における外科的対応、口腔内装置による対応①
3	【到達目標】 摂食嚥下器官である喉頭と食道の解剖用語を列挙し、摂食嚥下機構にどのように関わっているかを具体的に説明できる。  【授業内容】 鼻腔、咽頭、喉頭、食道の構造 テキストP52	11	【到達目標】 摂食嚥下の障害の基礎症状について理解し説明できる  【授業内容】 摂食嚥下障害の基礎症状	14	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する口腔内装置による介入にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における口腔内装置による対応② テキストP236～P251	15	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験
4	【到達目標】 摂食嚥下に関与する筋はどのようなものがあるかを列挙し、その起始停止を説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下に関与する筋 テキストP60～P67	12	【到達目標】 口腔ケアなどの口腔衛生管理について学び、その手技などを説明できるようになる。  【授業内容】 口腔衛生管理 テキストP185～P193	13	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する外科的アプローチや口腔内装置にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における外科的対応、口腔内装置による対応①	14	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する口腔内装置による介入にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における口腔内装置による対応② テキストP236～P251
5	【到達目標】 摂食嚥下の概要を理解し、その神経機構につき説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下の概要 テキストP68～P79	11	【到達目標】 摂食嚥下の障害の基礎症状について理解し説明できる  【授業内容】 摂食嚥下障害の基礎症状	15	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験	16	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)
6	【到達目標】 摂食嚥下と呼吸・生理について理解し、説明できるようになる。また、摂食嚥下のモデルにつき説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下との呼吸・生理、摂食嚥下モデル テキストP92～P105	14	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する口腔内装置による介入にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における口腔内装置による対応② テキストP236～P251	16	【到達目標】 摂食嚥下障害に対する外科的アプローチや口腔内装置にはどのようなものがあるかを列挙し、説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下障害への介入における外科的対応、口腔内装置による対応①	17	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)
7	【到達目標】 摂食嚥下のモデルにはいくつかあるが、それぞれにつき説明できるようになる。  【授業内容】 摂食嚥下モデル テキストP96～P105	15	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験	17	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験	18	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)
8	【到達目標】 第1回～7回までの講義内容に復習して発達と摂食嚥下機能の獲得過程について説明できるようになる。  【授業内容】 中間試験、発達と摂食嚥下機能の獲得過程 テキストP106～P112	17	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験	18	【到達目標】 第1回～14回までの講義の理解度を確認し、これまでの講義内容を総復習する。  【授業内容】 定期試験	19	【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)
【特記事項】				【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)			

科目名 (英)	嚥下障害 I Dysphagia I	必修 選択	必修	年次	1	担当教員	室田 由美子
		授業 形態	講義	総単位 時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 月・金曜 5限
学科・コース	言語聴覚士科 II部						
【教員実務経験】							
病院・訪問リハビリテーション・児童発達支援放課後等デイサービス・特別支援学校にて言語聴覚士として勤務した経験を持つ。							
【授業の学習内容】							
摂食嚥下障害の成人分野と小児分野での幅広い臨床経験を活かし、症例を紹介しながら嚥下評価の方法を伝える。演習やOSCEなども取り入れ、実践的な技能の習得を目指す。検査は今後の方針を立案するためのツールに過ぎない。検査が正確に行えるだけなく、なぜそれをするのか納得できる教示の仕方や負担のかかり過ぎない検査法を身につけ、検査結果から何が言えるかを解釈できるようになってほしい。							
【到達目標】							
・摂食嚥下障害のスクリーニング検査や掘り下げ検査が実施できる。 ・摂食嚥下障害の症例報告書の記載ができる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
「摂食嚥下リハビリテーション第3版」 医歯薬出版 配布資料				教科書該当ページを読んで予習できると良い。			
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【到達目標】 摂食嚥下のモデルについて復習し、説明できる。  【授業内容】 p96-105 摂食嚥下の5期モデル、3期・4期モデル、プロセスモデルについて復習し、問題を解く。	9	【到達目標】 頸部聴診や胸部聴診が実施できる。重症度分類が分かる。  【授業内容】 p164-165、p179-182 頸部聴診や胸部聴診について演習をまじえながら学ぶ。摂食嚥下能力グレード、摂食状況のレベル(FILS)を学ぶ。	10	【到達目標】 摂食嚥下障害の評価2019(摂食嚥下リハ学会)が実施できる。①  【授業内容】 嚥下調整食分類、栄養方法、カニューレについて学ぶ。	11	【到達目標】 摂食嚥下障害の評価2019(摂食嚥下リハ学会)が実施できる。②  【授業内容】 症例動画を見た後、症例報告書を作成し、発表する。
2	【到達目標】 摂食嚥下の観察ポイントが分かる。反復唾液嚥下テスト(RSST)が実施できる。  【授業内容】 p122-129 摂食嚥下の観察ポイント、スクリーニング質問紙、RSSTについて、演習をまじえて学ぶ。	12	【到達目標】 嚥下造影検査(VF)と嚥下内視鏡検査(VE)を解釈できる。  【授業内容】 動画で、健常の嚥下や誤嚥・喉頭侵入・咽頭残留を確認する。	13	【到達目標】 摂食嚥下障害の症例報告の作成方法がわかる。  【授業内容】 症例動画を見た後、症例報告書を作成する。	14	【到達目標】 間接訓練(基礎訓練)と直接訓練(摂食訓練)の概要が分かる。  【授業内容】 間接訓練と直接訓練の意義や方法について、ワークシートにまとめる。
3	【到達目標】 改訂水飲みテスト(MWST)が実施できる。  【授業内容】 p129-133 改訂水飲みテスト、フードテスト、舌圧測定について、演習をまじえて学ぶ。	15	【到達目標】 定期試験を通してこれまでの学習を総復習する。  【授業内容】 定期試験および解説授業を行う。				
4	【到達目標】 基準を満たした嚥下評価が行える。  【授業内容】 OSCEの手順を学び、練習後に実施し、フィードバックを受ける。						
5	【到達目標】 MASA(嚥下障害アセスメント)を実施できる。  【授業内容】 配布資料 MASAについての演習をまじえながら練習する。MASAの結果から障害像を把握する。						
6	【到達目標】 嚥下内視鏡検査(VE)の見方が分かる。  【授業内容】 p134-143 安静時の観察項目や食物嚥下での観察項目を学ぶ。症例について評価表を用いて検討する。						
7	【到達目標】 嚥下造影検査(VF)の見方が分かる。  【授業内容】 p143-152 観察項目や誤嚥分類や異常所見について学ぶ。症例について評価表を用いて検討する。						
8	【到達目標】 中間試験を通しこまでの学習内容を復習する。咳テストと頸部聴診法の意義と方法が分かる。  【授業内容】 p160-163 中間テストを行う。咳テストと頸部聴診法について、演習をまじえながら学ぶ。		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100～90点=A評価 点数 89～80点=B評価 点数 79～70点=C評価 点数 69～60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							

科目名 (英)	小児聴覚障害 Pediatric hearing impairment	必修選択	必修	年次	1	担当教員	佐藤 俊樹
		授業形態	講義	総単位時間	15	開講区分 曜日・時間	後期 木曜 7限
学科・コース	言語聴覚士科 II 部						
【教員実務経験】							
成人の脳血管障害(回復期・生活期)、神経難病の臨床に10年以上の経験あり。現在は成人聴覚障害、小児聴覚障害・発達障害等の臨床に携わる。							
【授業の学習内容】							
前半では末梢性難聴と中枢性難聴における聴覚特性および鑑別のための評価と適切な補聴について講義する。後半では聴覚障害児における聴覚・言語・コミュニケーション障害について、言語障害症状の鑑別に必要な言語・コミュニケーション評価についてその原理と実施方法を講義し、また各発達段階における言語障害症状の改善に必要な聴覚学習、言語・コミュニケーション指導について、聴覚障害児と家族に対する心理社会学的支援についても論述する。							
【到達目標】							
①小児聴覚障害学と関連領域の主要な用語と理論を理解する。 ②聴覚障害児の発達段階に応じた支援の基礎的知識と技法を習得する。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学第3版」 医学書院							
回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要	回	授業概要
1	【授業単元】聴こえのしくみと難聴の種類、難聴の原因と病態 【授業形態】講義 【到達目標】 小児期における難聴の病態(発症時期による言語習得違い、難聴の種類と特性、遺伝性などの種類と病態等)について理解を深める。						
2	【授業単元】末梢性聴覚障害と中枢性聴覚障害の聴覚特性と評価 【授業形態】講義 【到達目標】 末梢性聴覚障害と中枢性聴覚障害の聴こえの特性を知り、評価方法についての理解を深める。						
3	【授業単元】聴覚の発達について 【授業形態】講義 【到達目標】 小児期の発達と難聴の影響について理解を深める。						
4	【授業単元】小児の聴覚検査と種類 【授業形態】講義 【到達目標】 発達段階に対応した小児の各聴覚検査の種類と方法を理解する。						
5	【授業単元】言語・コミュニケーションの発達について 【授業形態】講義 【到達目標】 難聴児の言語発達・言語獲得の方法について理解を深める。						
6	【授業単元】言語・コミュニケーションの評価 【授業形態】講義 【到達目標】 言語・コミュニケーション評価の種類、方法について理解する。聴覚障害児の会話方式の種類、方法を理解する。						
7	【授業単元】難聴児への支援と訓練計画 【授業形態】講義 【到達目標】 難聴児に対する指導方法(聴覚活用・聴覚学習等)と保護者への支援について理解する。						
8	【授業単元】まとめと復習 【授業形態】講義・筆記試験 【到達目標】 国家試験に向け、小児の聴覚障害の内容について総合的に理解が出来ているかを確認する。		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、中間テスト(4コマ目授業内)40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							

科目名 (英)	聴力検査法 I Hearing Test I	必修選択	必修	年次	1	担当教員	畦地 雄平
		授業形態	講義	総単位時間	30	開講区分 曜日・時間	後期 木曜 5、6限
学科・コース	言語聴覚士科 II 部						
【教員実務経験】							
総合病院、訪問看護リハビリステーション勤務時、急性期及び生活期のリハビリテーション業務の実務経験がある。							
【授業の学習内容】							
病院、訪問業界で臨床経験を積んできた教員が、聴覚検査について理解が深められるように聴覚検査の検査法を習得できる授業を行う。具体的には、検査前の準備、検査法のイメージを抱けるように実場面の動画を豊富に活用して教授する。また聴覚検査内で取り扱う専門用語を適切に使用して説明できるようになることを目標とする。能動的							
【到達目標】							
聴力検査の種類、目的、検査方法や手順、結果の解釈が説明することができる。 純音聴力検査・語音聴力検査・自記オージオメトリーの正しい方法を学び、実際に実施ができるようなる。							
【使用教科書・教材・参考書】				【授業外における学習】			
【聴覚検査の実際 改定4版】南山堂				毎回、授業後に復習すること。			
回	授業概要	回	授業概要				
1	【到達目標】 伝音難聴難聴、感音難聴、混合難聴、心因性難聴の違いを説明できる 音の基礎知識を知ることができます 【授業内容】 各疾患の症状、経過、診断 純音、周波数、音圧、音圧レベル、聴野、ラウドネス、ピッチ、音色	9	【到達目標】 自記オージオメトリーの検査万法、結果の解釈を説明することができる 補充現象、一過性閾値上昇を理解し説明することができます 【授業内容】 自記オージオメトリーの演習				
2	【到達目標】 オージオメーターの使い方を説明できる 聴力検査の種類を知り説明できる 【授業内容】 オージオメーター保守点検整備 オージオグラム	10	【到達目標】 語音聴力検査:語音了解閾値検査(SRT)の目的、万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 語音聴力検査とは、目的 語音了解閾値検査:スピーチオージオグラム				
3	【到達目標】 気導聴力検査の準備、予備検査の提示、順序を説明ができる 気導聴力検査の本検査の提示、順序を説明ができる 【授業内容】 検査前の準備、検査法(予備検査・本検査) オージオメーターを使用した演習	11	【到達目標】 語音聴力検査:語音了解閾値検査(SRT)の目的、万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 語音了解閾値検査:演習				
4	【到達目標】 気導聴力検査の準備、予備検査の提示、順序を説明ができる 気導聴力検査の本検査の提示、順序を説明ができる 【授業内容】 オージオメーターを使用した演習	12	【到達目標】 語音聴力検査:語音弁別検査の目的、万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 語音弁別検査とは、目的と検査手順 語音弁別閾値検査:スピーチオージオグラム				
5	【到達目標】 骨導聴力検査の提示、順序を説明できる 【授業内容】 オージオメーターを使用した演習	13	【到達目標】 語音聴力検査:語音弁別検査の目的、万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 語音了解閾値検査:演習				
6	【到達目標】 マスキングに使用する用語、ノイズの種類と効果、必要な場合を説明することができます 【授業内容】 交叉聴取・両耳間移行減衰現象 オーバーマスキング・マスキングノイズ	14	【到達目標】 語音聴力検査:語音弁別検査の目的、万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 語音了解閾値検査:演習 語音弁別閾値検査:演習				
7	【到達目標】 自記オージオメトリーの検査万法、結果の解釈を説明することができます 【授業内容】 自記オージオメトリーの検査方法、Jerger分類と結果 補充現象、一過性閾値上昇の理解	15	【到達目標】 これまで学んだ呼聴力検査について改めて復習し理解を深める 中間試験、解説 聽力検査のまとめ 【授業内容】 定期テスト 定期テスト解答解説				
8	【到達目標】 これまでの学習の総復習を行い中間試験に挑む 【授業内容】 中間試験、解説 聽力検査のまとめ		【評価について】 筆記試験による定期試験60点、毎回の小テスト40点の配分を総合し評価する。 ○成績評価 点数100~90点=A評価 点数 89~80点=B評価 点数 79~70点=C評価 点数 69~60点=D評価 点数 59点以下=F評価 ※出席が70%に満たない場合はE評価(特別補講を実施)				
【特記事項】							